



## 年間第 24 主日 (ルカ 15:1-32△15:1-10)

人間の常識を超える神の忍耐

今週の福音朗読は、長い朗読を選ぶと「放蕩息子のたとえ」までが含まれます。今回は、短い朗読を選んで朗読しました。ルカ 15 章の三つのたとえを通して、見失ったものを辛抱強く捜し回る神の姿、忍耐強く立ち返りを待つ神の姿が描かれています。

神の忍耐について考える前に、人間の忍耐について考えてみましょう。人間は、どこまで忍耐できるものなのでしょう。どこまでだったら辛抱できるのでしょうか。一般的には、常識の範囲であれば忍耐するし、辛抱もすると考えます。

しかし限界を超えると忍耐できなくなります。私は未だに後悔する場面があって、大切なものが録音されている私のカセットテープを、四男の弟がカセットデッキで再生させていて、多分テープが機械に巻き付いたのだと思いますが、大切なカセットテープから茶色のテープを机に引き出して広げていたのを見たのです。

カセットテープから引き出されて机に広がるテープを見て、このテープは二度と使えなくなったと思った私に怒りがこみ上げ、私は四男の頭をこれでもかと殴ったのでした。何発も殴ったので、頭には何個もこぶができるほどでした。私はあとで親にひどく叱られましたが、四男の弟をどうしても許せなかったのです。もちろん今は和解しています。

これが、人間の忍耐とか辛抱の限界だと思います。限界を超えることがあると、もはや忍耐できない。常識の範囲でという制約や、限界があるのが人間の忍耐というものです。一方で、神の忍耐を教えるのが今週の朗読箇所であるルカ 15 章です。私の体験を踏まえて考えるなら、常識を超える忍耐を示す、限界を置かずに忍耐し待ち続ける。これが神の忍耐の姿だと分かります。

人間の常識で考えれば、九十九匹を置いていなくなった一匹を捜しに行くのは割に合わない行動です。銀貨を一枚見失っても、家を引っ越しでもしない限り、そのうちに見つかることもあるでしょう。家中を掃いて捜すのは労力の無駄のように思います。弟を無条件にゆるす父親に対して、人間の常識だったらこう反応するだろうと登場しているのが兄です。人間は、やはり人間の常識の範囲でしか行動しないものなのです。

けれども神の忍耐は人間の常識を超えます。なぜ人間の常識を超えて行動するのでしょうか。それは、人間が本来の輝きを取り戻すために行動するからです。途方もない罪を犯した人でも、人間本来の輝きを取り戻すなら、その人は生き返るはず。けれども人間は常識にとらわれてしまい、途方もない罪を犯した人に猶予を与えることなどできないわけです。

私が、途方もない罪を犯したなら、相手に「輝きを取り戻すまで猶予をください」とはとても言えません。処分されるのは当然で、相当の罰を受けてしかるべきだと考えるからです。実際「放蕩息子のたとえ」

に登場する弟は、僕の一人になることすら覚悟していたのです。人間の常識の範囲で行動していたのです。

人間の常識の範囲で救えない人がいます。常識を超えた行動でなければ、その人の本来の輝きを回復できない場面もあり得ます。けれども人間が常識を超えて行動することは難しいのです。常識を超えた行動を示す神が、先にお手本を示して、人間はようやく神のなさり方を知ることになるのです。

実はすべての人間が、常識を超える神のなさり方によって救われたと言って良いでしょう。ですから互いに、「こんなことはゆるされるはずがない」「こんな人が立ち帰りの努力をしても受け入れはできない」という常識を打ち破る覚悟を持ちたいのです。人間には不可能ですが、神は常識を打ち破る恵みを注いでくださいます。

年間第 25 主日(ルカ 16:1-13△16:10-13)